古今和歌集

特別
4
5299

昭和二七年三月十八日購入
へ4
5299

古今和歌集巻第一

春歌上

在原元方

年のうちに春は来にけりひとゝせを
去年とやいはむ今年とやいはむ

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを
春立つけふの風やとくらむ

題しらず

よみ人しらず

二条のきさきの春の始めの御歌
雪の内に春はきにけりうぐひすの
こほれる涙今やとくらむ

仁和の帝

芹つみにしるしもみえぬ武蔵野を
なにかたぬしありとこたへむ

光孝天皇

君がため春の野に出でて若菜つむ
わが衣手に雪は降りつゝ

題しらず

在原業平朝臣

春日野は今日はな焼きそ若草の
つまもこもれり我もこもれり

二条のきさきの春の始めの御歌

雪の内に春はきにけりうぐひすの
こほれる涙今やとくらむ

仁和の帝

芹つみにしるしもみえぬ武蔵野を
なにかたぬしありとこたへむ

光孝天皇

君がため春の野に出でて若菜つむ
わが衣手に雪は降りつゝ

題しらず

在原業平朝臣

春日野は今日はな焼きそ若草の
つまもこもれり我もこもれり

雪ふりつもれる我宿に
春のこゝろ先とくる
きつゝなれこそ
ゆきやへだてん
雪ふれば冬ごもりせる草も木も

今こんねんの雪ゆきふかくつもりたるを
詠よめる

仁和にんわの帝みかど

わがやどの雪ゆきをあはれとおもふらむ
たれかは人ひとの訪とひにこざらん

題しらず

在原ありはらの業平なりひら朝臣あそん

かぞへつつ君きみがよはひの数かずとらば
残のこりなくとく雪ゆきは消きえなん

源もとのゆきさだ朝臣

我せこの衣ころの裾すそうつすらに
春はるの柳やなぎの糸いとぞ乱みだるる

西大寺さいだいじの僧正遍昭

浅茅あさぢふの小野をのの篠しのの露つゆをだに
誰たれか哀あはれと思おもひ置おきけん

題しらず

伊勢いせ

難波なにはがた短みじかき葦あしのふしの間まも
逢あはでこの世よを過すぐしてよとや

元良もとよし親王みこ

今こんねんの雪ゆきを今こんねんの雪ゆきと見みるまでに
命いのちあればぞ我われは老おいける

在原ありはらの業平なりひら朝臣あそん

世よの中なかに絶たえて桜さくらのなかりせば
春はるの心こころはのどけからまし

題しらず

紀きの貫之つらゆき

桜さくらちる木このした風かぜは寒さむからで
空そらにしられぬ雪ゆきぞ降ふりける

素性そせい法師ほふし

見みわたせば柳やなぎさくらをこきまぜて
都みやこぞ春はるの錦にしきなりける

僧正遍昭

題しらず　　清和院后明子　大皇太后宮　品有三年正月一日丙午三忠仁公母

山ざくら　わが見にくれば　ちるものと　しりながらなほ　うかりけるかな

山ざくら　わが見にくれば　ちるものと　しりながらなほ　うかりけるかな

年ごとに　もみぢを葉ごと　ながすかと　見ゆるは山の　あらしなりけり　　忠仁公

世中に　たえて桜の　なかりせば　春の心は　のどけからまし　　在原業平朝臣

題しらず　　読人しらず

石ばしる　垂水の上の　さわらびの　もえいづる春に　なりにけるかな

山ざくら　ちるをみてよめる　　読人しらず

ちりぬとも　香をだにのこせ　山桜　花のたよりに　ありてかひなし

花ざかりに　京を見やりてよめる　　素性法師

見てのみや　人にかたらむ　桜花　手ごとに折りて　家づとにせむ

桜の花のもとにて年の老いぬることをなげきてよめる　　在原元方

年のうちに　春は来にけり　ひとせをば　去年とやいはむ　今年とやいはむ

春立つ日よめる　　紀貫之

ふるとしに　春立ちける日よめる　　紀貫之

題しらず　　読人しらず

そうく法師　雨坊

古今和歌集巻第三
夏歌

題しらず

我屋戸の池の藤なみ
こゝろあらん人もとめこね
ほとゝぎす山

古今和歌集巻第四

秋歌上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

秋来ぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

題しらず

よみ人しらず

河風の涼しくもあるか打ち寄する浪とも秋のしるしなりけり

寛平御時后宮歌合のうた

よみ人しらず

白露の色はひとつを置きわけて柳みどりに花ぞ咲きける

秋風の吹くにしるしと人はいへど目にはさやかに見えぬものから

二条后の春宮の御息所と申しける時に、東五条に住み給ひけり。秋ごろ、御息所物見給ふとて、久しくも成りにけるかなと、うち詠めて、いとど物思ひまさりけり。

二条后

白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける

是貞親王の家の歌合のうた

よみ人しらず

秋風に吹上の浜の浪見れば沖こぐ舟も岸に寄りけり

寛平御時后宮歌合のうた

よみ人しらず

久方の天の河原に立つ霧は七夕つめの打てる布かも

天の河霧立ちわたり彦星の舟出の波に月かかるらし

題しらず

よみ人しらず

天の河浅瀬しら浪たどりつつ渡りはてねば明けにけるかな

秋の夜の月の光し清ければくらぶの山も越えぬべらなり

藤原興風

秋の夜の月の光し清ければ人目も見えず物思ひもなし

秋の夜の月の光を見ては人の国にも思ひやるかな

秋の夜の月の光は分きていづくとてもの憂かるべきかは

藤原忠房

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

是貞親王の家の歌合のうた

藤原忠房

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

是貞親王の家の歌合のうた

藤原忠房

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

秋の夜の月の光は明かくて人の国まで行かまほしきを

これをうつつこれ家の
秋風に初雁をきこゆなりて来ん
ワの門ようあせ鳥なく
伴とやいわう雁こえて
三室の下てつゝ秋
更をしこ夜うかれ
こゝ方ありく人の
寛平の河きさいの
妹風あをりあをて
藤原菅根朝臣

うつつこれをきこてもれ
こゝ
是貞のつこれ家
山里妹そいつゝワひ
おく山下紅葉つゝ
郭公
秋こえうしまこれ
あこ森とこゝ
これうつこれ家

これさだのみこの家の歌合のうた

文室やすをが

草も木も色かはれども秋風に
あへぬ涙の露ぞこぼるる

紀とものり

紅葉をば雨と降らしてとどむらん
人こそ知らね秋雨の声

信正遍昭

秋の野に笹分けし朝の袖よりも
逢はで寝る夜ぞ露けかりける

[illegible]
貞観殿 [illegible] 梅の木あり [illegible]
[illegible]
藤原勝卓
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

文うの秋の夜とかりこもれ
仁和ノ帝ノ御うた
きとめかせられさまとてまりそる

[illegible]

人の家うりうきくれ毛とうへうる
けうのき

[illegible]

[illegible]

文はんのひさりうめ
[illegible]

藤原朝雄

題うた

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第六
冬歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

浦うくうつる雪いろこ

見わたせば松山こえて今
　壬生忠岑
こえつる雪のうへの雪
こえてゆく人やたれ
　しら雪のまがふ山里
雪ふりて人もかよはぬ
　梅の香をあるじがほ
冬ごもりそこともわかぬ
雪ふれば木ごとに
きよくともやふ
雪ふりくらしてやまもや
梅の香をたづねてぞ
　川りゆき

冬ごもり
風ふきみだる
てこもれる
朝ぼらけ
　紀友則
雪ふれば木ごとに
梅の花
こゝろあてに
しらずとも
花ぞ昔の香ぞ袖
雪のうへに
　小野千古
朝ぼらけ
雪ふれば冬ごもりせる
梅の花

梅の香をとめの雪にうつさせて
雪ふり寒き夜半の袖かな

雪ながら山もと霞む夕べかな
梅が香にのっと日の出る山路かな

うつすとも春やまだ見ぬ人の面

春の雪

雪とのみ降りしく花の白妙に
吹きまがへたる小夜の嵐か

雪ながら山もと霞む夕べかな

春の雪

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

春の雪

雪とのみ降りしく花の白妙に
吹きまがへたる小夜の嵐か

春の雪

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

春の雪

雪とのみ降りしく花の白妙に
吹きまがへたる小夜の嵐か

春の雪

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

降りそめて雪かあらぬか白妙の
庭の松原うすらぐ日影

古今和歌集巻第七

賀歌

題しらず

よろづよをちとせにかねてきみがため
はつかりがねはきょうやきくらん

仁和の御時に、僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御うた

ならのやへさくらけふをみやこにてはるかにおもふおくのやまざと

仁和の御時に、僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御うた

あきやまもいろなかりせばしらつゆもおきそへがたき袖とやはみる

仁和の御時に、僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御うた

ちはやぶるかみやきりけんしらくものたえてとしへるいのちなりけり

仁和の御時に、僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御うた

在原なりひらの朝臣

つくばねをかのみねよりおつるみなそれもつもりてふちとなりぬる

僧正遍昭

はるのよのゆめばかりなるたたまくらかひなくたたむなこそをしけれ

(貞観十四年右大臣右大将宮云々)

在原なりひらの朝臣

おきもせずねもせで夜をあかしてはしらつゆけしとひとにいはれむ

(貞保二年式部卿親王二条后宮云々)

これたかのみこ

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬけるはるのやなぎか

(家平朝臣)

きのつらゆき

ちりぬればこふれどかひもなきものをはかなくみえしあだなりけり

(或位之雅遊行)

藤原忠平

秋

冬

典侍藤原[illegible]の朝臣

古今和歌集巻第八

離別歌

紀貫之

在原行平朝臣

藤原慧慶　延長七年春城

左近将監宣憲

源さね

藤原これより

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第九

羇旅歌

安倍仲麿

在原業平朝臣

在原業平朝臣

きみやこし我やゆきけん思ほえず
夢かうつつか寝てかさめてか

きのありつれ

朱雀院のをみなへしの歌合のとき

女郎花秋の野風にうちなびき
こころひとつを誰に寄すらん

そうくの内侍

秋の野の草のたもとか花すすき
ほにいでて招く袖と見えけん

素性法師

古今和歌集巻第十

物名

藤原としゆき朝臣

ふるさとのをみなへしといふ事を

よめる

ふるさとの花みるごとにおもほえず

心のうちにものぞかなしき

在原なりひら

ふるさとの花のすすきを神さけの

酒にうかべてをみなへしかな

壬生忠岑

たちとまりたれをかしらんをみなへし

われもしばしはつゆのよのまを

よみ人しらず

あきの野にやどりはすべしをみなへし

こゆきてのちは風もこそふけ

かきのもとにて

今こんとたのめしものををみなへし

かれもはてねばうらみてぞゆく

よみ人しらず

あきの野のをみなへしをばおほかれど

とのごとをりてをれるしぞなき

よみ人しらず

葉ながらもちるものからをみなへし

をりてぞ人にうとまれにける

よみ人しらず

やまとのくにあをやぎといふ所にて

やどれりける夜

秋ふかみ今やとりけんふるさとの

かきねのもとにきりぎりすなく

古今和歌集巻第十一

戀三

題しらず

古今和歌集巻第十三

恋一首

読人しらず　小野小町

思つゝぬるよの夢しばしばもとめきてはうつゝなき人をこひしきに目をさましてしかあはれいかばかりなる夢ぞとやいふ

素性法師

嵐風のはげしき夜ごとにわれてまつ人の心もしるばかりなり

あふことをいのちにつぐとききしかどあふにしかへばなほぞわびしき

古今和歌集巻第十三

恋歌三

小野小町

[illegible]

きよこそれやゆ

白河のそこまでといへばいくそ夜

[illegible]

平宣文

[illegible]

我名とまつのてしの川の山ほとゝぎす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第十四

恋歌四

題しらず

よみ人しらず

みちのくうのさかなれ松のひとよゐしき事をいふべきやうもなくてよめる

伊勢

君をのみ千世とかぎれば我ながらいくほどいきむ命とぞおもふ

よみ人しらず

夢ぢにもかよふ心のかよはずはうつつにいかであふとみるらん

伊勢

石ばしのはしめも終もしらぬまに何かはてのあはむとすらん

よみ人しらず

ふるさとの花をうつろふ物とのみ

ありわたる

ふるさとの花をうつろふ物とのみ

九河内ぬし

ながらへてふる人なれば人の世のあるにつけても見つるかな

よみ人しらず

あらたまの年をへだてて逢事はいくらもあらじ

宮ぢにてよめる

よみ人しらず

いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな

よみ人しらず

いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな

よみ人しらず

いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな

大伴くろあり

典侍藤原くろあり

大伴くろあり

古今和歌集巻第十四

恋奇又

立隔のきさいの宮の
つぼにおよびて物つかはしけるに
ほとゝぎすもなかなれて
れとえやは伊吹のさしも草
下月かげのいろし
それかあらぬか
あるなるべし

在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの我身ひとつ
もとの我にして

藤原のりひら朝臣

我ならぬ我ともとめしうつゝにも
夢にうきねをなにかなげかん

在原業平朝臣

わびぬれば身をうき草の根をたえて
さそふ水あらばいなむとぞ思

九河内行恒

久しくありてつかはせりける
みてだに又もあひ見てしがなきみもわれ
をもものおもひなるらめ

よみ人しらず

伊勢

今はとて我が面影のとまれかし
人と思ふ心の残るばかりを

小野はるき

吹きかよふ野風ばかりを形見とも
とまりしとへぬ
あはれそれとて

雲林院の兄こ　常保親王仁明帝

今までの山ぢ越えん年つき

源宗于朝臣

つまもなく成りにけるかなの第七句かなる
こゝろこそうつりやすけれ
にりてもらをとゝりてつゝりろ

藤原高岡朝臣女

無衛

伊勢

冬ごもりのこゝろをよみ侍りける

小町

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

小野小町

いりあひのかねのこゑこそ悲しけれ

あすの夕べをたれかまつべき

(忠仁公)

染殿后宮

(光孝天皇)

(宇多天皇)

(延喜十三年正月崩御)

(贈太政大臣)

(贈太政大臣忠仁公の姫君)

(延喜十六年八月薨去 五十六 太政大臣 関白 贈)

(延喜二十三年二月薨去 五十六 太政大臣忠仁公の姫君 朝臣時宣前下書有後之也)

うせい

河はやき世とは思へど

ありのすさみに

なかれてそ

ありのすさみに

なかれてそ

ありのすさみに

なかれてそ

題しらず

読人しらず

わびぬれば身をうき草の根をたえて
思ふらめとや人の見るらむ

在原業平朝臣

世の中にたえて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるれば
むべ山風を嵐といふらむ

僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ
をとめの姿しばしとどめむ

素性法師

つくばねの峰のもみぢ葉心あらば
今ひとしほの色はみせなむ

大江千里

月見れば千々にものこそ悲しけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

藤原敏行朝臣

住の江の岸による波よるさへや
夢の通ひ路人めよくらむ

在原元方

年のうちに春は来にけりひとせを
去年とやいはむ今年とやいはむ

紀貫之

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ

素性法師

今来むといひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな

在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かばいま帰りこむ

小野小町

古今和歌集巻第十九

雑躰

短歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

在原元方

古今和歌集巻第二十

大哥所御作

東雲

家づと後證本こゝに書入 以異本校訂 今別書く

巻第十 物名部

[illegible]

[illegible]

在部

かゝりてゝ行とも五月雨ふりて物を

とゝいへ乃本反切下

くれ乃ゐ

こゝろと志つとれゝゆゑ

忍草利貞下

と末乃井

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此集家ニ所持雖レ為二多日一仍師説之外
見為備披学之説也不レ可二書写一
近代僻事不レ可レ用之
秘事一冊通二之外一無二他見一
但必ス用捨只一ノ伝共方ニ可レ用之
如レ此之別為同之可レ用之

嘉禄二年四月九日　　前尚書判

此本所レ持大史為相　　前中納言時賢卿六十八条門跡覚判

折紙

ハ4
5299

門 ベ4
5299
和漢

古今和歌集 全部

飛鳥井雅親卿

真蹟與疑者也

正徳三癸巳暦

林鐘下旬

雅親

代用錄

特別
4
5299

へ4
5299

右今集會之郎

雅親卿真蹟

黄金弐拾枚

正徳三巳暦

林鐘下旬